

# 華後宮の劍姫

湊 祥 Sho Minato



アルファポリス文庫

## 第一章 無理難題

『詔令文書

此度、朱鈴苺しゅりんめいに与える役目をここに記す

- 一、徳妃とくひ・林蘭玉りんらんぎよくの専属武官として、後宮にて仕えよ。任期は未定
- 二、武官として仕える際は、素性を隠して男を装い、宦官かんがんとなれ

以上』

まさに、青天の霹靂へきれきだった。

文箱ふばこに入っていた紙が紫色をしていたのが見えた時点で、鈴苺は大層嫌な予感がしていた。

紫——それはもつとも高貴で威厳のある色。

華国かこくにて唯一無二の支配者である皇帝に関わるものには、使用が許可されていない色である。

つまり、この詔令文書は皇帝が出した命令書ということになる。何人たりとも齒向かうことは許されぬ、絶対的な命というわけだ。

まあ、それはいいとする。鈴母と皇帝は、同じ釜の飯を食った旧知の仲である。彼がわざわざ書状を送ってまで命じてきたことならば、従うのもやぶさかではない。だが、しかし。

「意味が、分かりませんが……?」

思わず途切れ途切れの言葉になってしまった。命の内容があまりにも予想とかけ離れていたのだから、無理もない。

——普段通りの午後だったはずなのに。いつも通り、道場の外で愛刀を振り回し、軽く流れる太刀筋に「よし、今日も調子がいいわ」と、機嫌よくしていたところだったのに。

幼馴染である祥明が持ってきた文書の中身に、一瞬でほくほくした気分など吹っ飛んでしまった。

「……ごめん、俺も『二』についてはよく分からん」

祥明が顔を引きつらせながら言う。

十八歳の鈴母より三歳年上の祥明とは、物心のつく前からの仲だ。

鈴母の父が営んでいる刀術の道場に、齢五つのころから三年ほど前まで、門下生と

して彼は籍を置いていた。

三年ほど前——そう、祥明が皇帝の専属武官として仕えるようになるまで。身幅の広い青龍刀を自由自在に操る彼は、華国屈指の刀術使いなのだった。

鈴母と祥明の両親同士も仲がよく、ふたりも年頃になってきたので「そろそろ祝言を」なんてことをしょっちゅう話しているらしい。

しかし、毎日武の道を極めることに忙しい鈴母は、まだ結婚なんて遠い話のように思っていた。

「劉ぎ……へ、陛下はなぜこのようなご命令を!?」

昔の呼び名で呼ぼうとしてしまい、鈴母は慌てて言い直した。

華国の現皇帝、劉銀。弱冠二十歳ながら、文武両道の名君だと市井の民の間では非常に評判がいい。

まあ、名高いのは能力だけが理由ではなく、女性に見まがうほどの、絶世の美貌も備えているからだろうが。

さて、その劉銀だが。幼少のころに三年ほど道場に身を置き、鈴母や祥明と一緒に日夜稽古に励んでいた。

高貴な血筋の者が、下町の道場で暮らすなど本来なら考えられないことだが、先代の皇帝はとてつもない視野が広い人物だった。

「上に立つ者になるためには、武芸を極め、民の生活も知らなければならぬ」という言いつけによって、そのようなことになったらしい。

まるで、奉公させられるかのように置いていかれた劉銀だったが、彼は徐々に道場の生活に溶けこんでいった。

前皇帝の「武道に励んでいる間は位も血筋も意味などない」との言いつけから、恐れ多くも道場内では他の門下生と同じ扱いにされたためだ。

やんちゃな子どもだった鈴母と祥明は、次第に劉銀と馴染み、彼が来て一年ほど経ったころには、ともに悪戯をしては師範に叱られ、時には子ども同士のちゃんな秘密を共有してこっそり笑い合う仲となった。

そう、三人には身分を超えた絆がある。

道場を巣立った劉銀とは何年も顔を合わせてはいないが、鈴母はその絆がまだ三人全員の中に存在していると信じている。

——信じていた。信じていたというのに。

こんな意味の分からない命令をするなんて、昔の誼よしみがあるとはいえ、あんまりではないか。

「……祥明。さっき、『二』についてはよく分からない」と言いましたよね？ では、『二』については、それなりに納得できるということですか？」

「まあな。今、後宮内が殺伐としてんだよ」

「殺伐……？」

「女官が立て続けに行方不明になってるんだ」

瞳に神妙な光を湛えて、祥明は言う。

そして、さらにこう続けた。

「半年くらい前からだったかな。女官が頻繁にいなくなるんだ。後宮での生活に嫌気が差した者の脱走は、ちよいちよいあるから最初は皆気にしてなかったんだけど……。あまりにも頻度が高いし、脱走なんかしなそうな女官までいなくなるから、これは誰かが誘拐してんだろうなっていうのが、陛下のご判断だよ」

「それは……随分物騒な話ですね」

「だよな。それで、後宮内の警備増強のために、腕が確かなお前に白羽の矢が立ったんだろ」

なるほど、確かにそこまではとても得心がいく。

だがやはり、問題は『二』、武官として仕える際は、素性を隠して男を装い、宦官かんがんとなれ』である。

——男を装う？ 宦官かんがん？ なんてそんなことをする必要があるの？

考えれば考えるほど理解に苦しむ。

しかし、劉銀とは普段から面を合わせている祥明も、この勅令についてはよく分らないとのこと。

だが、よく分からなくてもとりあえず従わなければならない。だって相手は絶対君主なのだから。

「まあ、陛下が後宮に御渡りになる時は、俺もついていけるしさ。何か困ったことがあれば、頼ってくればいいから」

鈴苺にとっては空前絶後の内容が記されていた詔令文書だったというのに、祥明にとってはそれほどでもなかったようで。

彼は軽く微笑みながら、そう言ったのだ。

少し釣った目に、形のよい鼻梁<sup>びりょう</sup>、薄い唇。長身痩躯なこともあり、なかなかの美丈夫だと鈴苺は思う。

しかし性格は、常に飄々としていて、気まぐれな猫のように掴みどころがない。

また、女性に人気がありそうな容貌だとは思いますが、浮いた話は一切聞いたことがなかった。

なお鈴苺とは付き合いが長すぎて、男と女というよりは兄弟弟子のような間柄だ。

季節の行事で珍しく鈴苺が女らしく着飾る場面でも、「動きづらそうだな、それ」と色気のないことしか言ってこないし、まったく女扱いされていない。

親たちは「で、お前らいつ結婚するんだ？」なんて茶化してくるけれど、鈴苺は黙ってやり過ぎすし、祥明は祥明で「別に俺はいつだっていいっすけど」なんて笑って受け流している。

確かにふたりは結婚適齢期ではある。

しかし、お互いにそんなつもりはなく、気心を知り尽くした盟友だと鈴苺は思っている。

そんな祥明が、この無理難題をこなす力になってくれるのは、素直に嬉しい。——しかし。

「……後宮なんかに入ったら、思う存分稽古ができないじゃない」

と、鈴苺は肩を落とす。

護衛の任務なのだから常に帯刀できるとは思いますが、四六時中妃嬪の警護にあたらなければならぬということは、自分の思うようには刀は振れないに違いなかった。

「そりゃそうなるだろうなあ」

「ですよね……。ああ、本当に憂鬱だわ」

「まあ、詔令文書で来られちゃ、逆らえないよな。腹を括るしかないな」

「……なんだか軽く受け入れすぎじゃないですか。後宮に入るだけならいざ知らず、その上男装まで命じられているんですよ?」

「いやー……。お前が男装して後宮で暴れる姿を見るのも、なんかおもしろそうだなって正直思ったわ。はは」

「……なんですか、それ」

おもしろそうとはなんだ。人を見世物みたいに。

半眼になって鈴母は祥明を睨んでしまう。

しかし彼は、口元を緩ませたままだった。

そんな彼の様子に鈴母は深く嘆息する。

そんな鈴母とは裏腹に、祥明はというと。

——劉銀め。なんてことをしてくれるんだ。

内心、皇帝である劉銀が恨めしくてたまらなかつた。

実は祥明は、鈴母にぞっこんだった。

武官として任務についている時も、食事をしている時も、寝所で眠りにつこうとしている時すら、頭の中は鈴母に支配されていたのだった。

他の女性を目に入れる暇などない。後宮で美しく着飾っている妃嬪たちを見ても、美しい風景だなくらいにしか彼は感じないのだった。

その上、「この妃が着ている衣裳、鈴母に似合いそうだな」と、つい彼女のかわい

らしい姿を想像する始末である。

中性的だが、灰汁あかひとつなく整った美しい面立ち。普段はひとつに結わえている、背中の半分ほどにまで伸びた透明感のある茶褐色の髪は、その色白の肌をさらに美しく見せている。

そして小柄で折れそうなほど細い身体は、目にするたびに抱擁したくなってしまふ。

しかし鈴母の魅力は、可憐な外見がすべてではない。

その小さくしなやかな身体から繰り出される、華麗な刀術。風に舞うように刀を振るう姿は、もはや芸術と言っても過言ではない。

皇帝専属の武官である祥明ですら、瞬間の速さは彼女には敵わないほどだった。

鈴母と祥明の両親が自分たちの婚礼に前向きなのは、願ってもないことだった。鈴母にそんな気は全然ないらしいが、すでに外堀は埋まっているので、自分が徐々に彼女をその気にさせるように動き始めた時だったのに。

——早く正式な夫婦になって、思う存分鈴母を愛でたい。

そんなふしだらな欲望を満たすことを劉銀に邪魔され、祥明は心底苛立ちを覚えていた。

しかし鈴母に言った言葉はあながち嘘というわけではなかった。

後宮は風通しが悪く、常に陰謀が渦巻いているどす黒い空間である。劉銀の護衛に

なって三年経つが、いまだにあまり足を踏み入れたくない。  
 そんな混沌としている後宮に、鈴苺という爽やかな風が吹き乱れたらどうなるか。  
 波乱の予感しかない。

その光景を想像するだけで、祥明の胸の内は深い愉悦で支配されるのだった。

## 第二章 美しき四夫人

「あなたが鈴苺……いえ、ここでは鈴翔だったかしら！」

劉銀の寵姫である、四夫人のひとりの徳妃・林蘭玉は、張りのある可憐な声で言った。

後宮にて宦官として勤めることになった初日のこと。鈴苺は、自分の主となる林徳妃の住居である夏蓮宮の一室にいた。

「さようでございます、娘々。こちらでは宦官のふりをするようにとの陛下のご命令ですので、男性名の鈴翔で通していただければと」

林徳妃に向かって拝跪しながら、鈴苺は丁寧と言った。

「あら、そんなにかしこまらなくてもいいわよ。面を上げて頂戴」

気さくにそう言われて、鈴苺は素直に顔を上げた。椅子に腰を下ろしていた林徳妃は、満面の笑みを浮かべている。

年齢は、鈴苺のひとつ上で十九歳と聞いている。

黒曜石のように輝く大きな双眸、艶やかな漆黒の髪、新雪のように白い肌は、さす

がは皇帝の愛妃と言えよう。

小柄で童顔であるため、年齢の割に幼さを感じるが、出るところはきちんと出ている。不整合な顔と身体の具合が、特有の色気を強調していた。

詔令文書には詳しいことは書かれていなかったが、後宮に入ってから任務の詳細を官吏から聞かされた。

鈴母の職務は、林徳妃の専属の護衛として、身を挺して彼女の安全を守ること。彼女が夏蓮宮を離れる場合は、特に注意して警護するようにとのことであつた。

任務の都合上、林徳妃と彼女にかしずいている一部の女官のみには、鈴母の本来の性別を明かしていたのだった。

「私の専属の護衛ってことで、これからよろしくね！ あの、陛下があなたのことを鈴鈴呼んで呼んでいたのよ。なんだかわいい呼び名だから、私もそう呼んでいいかしら？」

「はあ、構いませんが……」

嬉々とした面持ちでそう言われてしまったら、承諾せざるを得ない。

——武官にはかわいらしすぎる名前よね……。もう、劉銀つたら。

子どもの時の呼び名で通さないでいただきたいものだ。

そんなことを考えていると、林徳妃は目を細めて鈴母を見つめていた。まるで観察

でもするかのような視線に、戸惑いを覚える。

「あ、あの。林徳妃様。私に、何か……？」

「あ、いえ……。男装、とても似合っているのだけどね。ちよつと美少年すぎないかしらねえ……。心配だわ」

「心配……と、申しますと」

「だってここは欲望渦巻く後宮ですもの。愛に飢えた女官や、少年趣味の宦官かえがんが変な気を起こさないかどうか……」

心底案じているように林徳妃は言うが、鈴母はいまいち理解できなかった。

——こんな貧相な体の武官に、そんな気を起こす人がいるのかしら。

鈴母は物心ついたころから、父親の道場で、日々刀の鍛錬を行っていた。

そのせいか、自身の容姿について恐ろしく興味がなかった。

林徳妃の言う通り、見る者を魅了する愛らしい外見をしているのだが、本人はあまり知らないのだった。

「よく分かりませんが、腕には自信がありますので。変な者が近寄ってきたら、のせばいいだけです」

自分に害をなすものは、刀を振って追い払えばいい。今までそうやって生きてきた鈴母は、いつもの調子で言う。

すると林徳妃はおかしそうに笑った。

「おもしろいわねえ、鈴鈴。陛下はいい子を私につけてくれたわ。腕は申し分ないって言っていたし。ねえ、桜雪」

「さようでございますね。徳妃様と年齢も近いみたいですし、よい関係を築けそうですね」

林徳妃に話を振られた、女官の桜雪は鷹揚に頷きながら言った。

夏蓮宮に籍を置いている女官の中で、もっとも徳妃が信頼を寄せているのが彼女だとのこと。

「あ、桜雪もそう思う？ それじゃあ鈴鈴。後で貢物のお菓子をいただきますよ。庭園で鞦韆遊びもどう？」

「……徳妃様。鈴鈴は護衛ですからね。武官の方はあなた様をお守りするために常に気を張っているのですから、あまり遊びにつき合わせないように」

苦笑を浮かべながら、たしなめるように桜雪は言った。林徳妃はべろりと舌を出す。桜雪の年のころは、二十代前半といったところか。林徳妃に対する振る舞いを見ていると、優しく見守る姉のような立場らしい。

常に柔和な微笑みを浮かべているが、主に対しても言うべきことはきちんと言う。そんな桜雪に、鈴母は好感を持った。

鈴母の真の姿を把握している女官は、桜雪とその下の数名だけだった。

鈴母としては、夏蓮宮の女官皆が自分の素性を知ってくれていたら過ごすのも楽なのだけど、ここは陰謀渦巻く後宮。

誰がいつ、間諜としての正体を現すか、叛意を示すか分からない場所なのだ。

よって、秘め事は真に信頼できる数名のみで共有するのが常識なのであった。

しかも、現在皇后が不在であるこの国は、皇后の次の位である四夫人による立后争いが激しく、後宮内のいたるところでピリピリしている、鈴母も風の噂で耳にしていた。

四夫人こと正一品は、貴妃、淑妃、徳妃、賢妃の四名で構成されており、鈴母の眼前で優雅に座る林徳妃もそのひとりだ。

林徳妃は、先代の皇帝に仕えていた宰相のひとり娘で、劉銀とは乳飲み子のころから関わりがあったそうだ。

劉銀ともっとも皇后に近いと市井の民は皆噂をしていた。肝胆相照らす仲であるとすら言われている林徳妃は、もっとも皇后に近いと市井の民は皆噂をしていた。

確かに、直接林徳妃と相對した鈴母は、彼女の魅力をふつつつと感じていた。高位の妃でありながら、それを感じさせない人懐っこさと、寵姫として申し分のない美しさ。

もし皇后の座についたとしても、彼女の信念で、彼女の歩幅で、後宮をそつなく掌握しそうな気配を感じ取れる。

徳妃以外の四夫人については、まだ顔を合わせていないので鈴母はよく知らない。

貴妃は絶世の美女だとか、淑妃は十年前と変わらない姿をしているからあやかしの類ではないかとか、賢妃は科擧を突破した文官よりも聡明だとか、巷で聞き及んだ情報を知っているが、所詮根も葉もない噂である。

——女官の行方不明事件が気になるし。徳妃様以外の四夫人についても、情報を集めないよ。

後宮の内情は、位の高い者のところに集まるはずだ。まずは自分に無理難題を言っでここに引っ張りこんだ劉銀に話を聞きたいところだったが、さすがに一介の武官が皇帝呼びつけるわけにはいかない。

まあ、昔の彼の様子から考えると、そのうち直接話をする機会を設けてくれるだろう。

というわけで、まずは徳妃に女官の行方不明事件について尋ねようと、鈴母は口を開いた。

「徳妃様。私にここに呼ばれたのは、最近後宮で女官が行方不明になっていることが関係しているのではないかと、祥明が申し立ていたのですが……」

「あー！ その話ね！ うん、いろいろ詳しく話そうと思っていて。……だけど、もう時間切れみたい」

「時間切れ……？」

「ええ、鈴鈴。徳妃様はこの後すぐに、他の四夫人とともに茶会の予定が入っているの。そろそろ、御着替えや御化粧の御仕度や、水菓子と茶の用意をしなければならなくって。こみ入った話は、その後にお願ひね」

ばつが悪そうに微笑む徳妃の代わりに、桜雪が説明をした。

「なるほど、そうだったのですね」

「はい。鈴鈴も、徳妃様の護衛としてもちろん随行してちょうだいね」

「かしこまりました」

その後、鈴母は林徳妃と桜雪とともに、衣裳部屋へ移動した。

徳妃は衣裳担当の女官に手早く着替えさせられ（肌着を合わせる時は、鈴母は席を外していた）、半透明の披帛や重そうな金歩揺を次々と合わせ、あーでもないこーでもないと言いつつも美しく見えるものを探していく。

そしてその間に、化粧係は徳妃の美肌をさらに白く塗っていた。嗅ぎなれていないためか、白粉の匂いを強く感じた鈴母は、鼻腔をむずむずとさせた。

「……衣裳も化粧も、今日はなんだか気合いが入っているわねえ」

「だって、本日は久しぶりに四夫人が一堂に会する茶会なのですから！ 美しく仕上げないと、小馬鹿にされてしまいますわ！」

疲れた顔で女官に身を任せる林徳妃とは対照的に、気概に満ち溢れた様子で化粧係の女官は言った。

——お姫様も大変だわ。きれいだけど、重そうなお衣裳……

木偶でくのように女官に身を任せて美しくなっていく林徳妃を見て、他人事ながらも鈴母は同情するのだった。

四夫人が集う茶会は、後宮の庭園の一角で行われた。

徳妃の少し後ろを、警戒しながら歩いて到着した庭園は、見事な藤棚によって囲まれていた。

濃い紫色の藤の花が隙間なく垂れ下がる様は、艶やかかつ幻想的であり、鈴母の心は躍る。

藤棚をかき分けるように建てられている四阿あやまやに宴席は設けられていた。すでに、徳妃以外の四夫人は集っていて、脇息きょうきくにしながらかるように身を預け、くつろいでいる妃もいる。

——ん？ 子どもが紛れている……？

鈴母が思わず凝視してしまった彼女は、瑠璃色の裙ももすそに、桃色の上襦うわわきを合わせ、さらに薄紅色の披帛ひはくを垂らしていた。きれいな色合いではあるが、幼女が好むような派手な色彩だ。

宴席にちよこんと座っていたが、小柄な林徳妃に比べても随分華奢で小さいように見えた。

どこからどう見ても童女だった。後宮で生まれた子どもが紛れてしまったのかと、最初は思った。

しかし彼女は主賓の席に腰を下ろしているのだ。それは、つまり。

——四夫人の、誰かってことよね……？

あまりに信じられなくて、さらに目を凝らして見てしまう。——すると。

「鈴鈴。そんなに見ちゃだめよ」

鈴母の傍らに立つ桜雪に、苦笑しながらたしなめられてしまった。

「あ、すみません。つい……」

「まあ、信じられないのも無理はないわ。どう見ても十代前半くらいよねえ。あの方は姚愛やうあい香かう様……淑妃しゆひ様よ。ああ見えて、御年二十八なのよ」

「にじゅうはち……!?」

衝撃的過ぎて、思わず復唱してしまう鈴母。桜雪の言う通り、どう多く見積もって

も十五には届かなそうな外見なのだ。

それがまさか、実年齢と十以上も乖離しているなんて。

「わあ、この荔枝っていう果物、甘くておいしいですわ〜」

肉叉に刺された水菓子を頬張りながら、舌つ足らずな声で言う。その姿は、ますます無邪気な子どものようにしか見えない。

——何か、特別な美容法でも行っているのかな。四夫人だから、化粧品は高価なものを使っているんだろうけど……

そんなことを考えていると、姚淑妃は自分の隣に座る女性の袖を引いて、こう言った。

「ねえ、白賢妃様。これ本当においしいですわよ。こっちの山竹という果物も！あなたも食べて」

「ふむ、そうか。ではひとついただこう」

姚淑妃に白賢妃と呼ばれた妃嬪は低い声でそう言うと、小卓の上に供された水菓子をひとつ口へと運んだ。

あの方は賢妃・白高花様よと、桜雪は林徳妃が宴席につく準備をしながらも、鈴母に耳打ちしてくれた。

市井で耳にした話だと、白賢妃は四夫人の中でもっとも年長だと言われていた。確

かにそれは事実だったようで、恐らく三十代に差し掛かったところだろう。

しかし彼女はとても美しかった。鋭い切れ長の双眸に、すっと通った高い鼻梁。厚い唇には、深緋色の紅が引かれていて、きりりとした面立ちの彼女にはその渋みのある色がとても似合っていた。

年齢を重ねた上でしか醸し出せない上質な色香は、少し離れた場所にいる鈴母にもひしひしと感じられた。

姚淑妃と白賢妃が隣同士に並ぶとまるで親子のように見えてしまう。

しかしふたりは気心の知れている仲のようで、水菓子を食べては微笑みあって話している。

「遅れてしまつてごめんなさい。準備に時間がかかつてしまつて」

鈴母の主である林徳妃が、申し訳なさそうに言いながら宴席につく。鈴母は彼女の背後に背筋を伸ばして立った。

護衛としてもっとも適切な位置だと思つ。腰にぶらさげた愛刀を、いつでも抜く覚悟はもちろん備えている。

よく見ると、他の四夫人の傍らにも護衛らしき武官がいた。茶会の場でもひとりひとりにびたりと警備がつかなければならぬほど、やはり現在の後宮内は殺伐としていろいろのらう。

「あら、本当に準備がお時間がかかったの？ いえ、ごめんなさいねえ。その割には、いつもと変わらないお姿であるように見えて」  
 間延びした声でこれ見よがしに嫌味を吐いてきたのは、まだ桜雪に名前を教わっていない妃嬪だった。

しかし残るは貴妃である、梁羅世（りょうらせい）しかいない。確か、絶世の美女として庶民の間では謳われている妃嬪のはず。

——ああ、確かに類い稀な美しさだわ。

遠目にも、梁貴妃の煌びやかな魅力は眩しく映った。

吸いこまれてしまいそうな大きな茶褐色の瞳は流星のように輝き、薄桃色の形のよい唇は愛らしく艶めかしい。

西のほうの血が混じっているのか、華国では珍しい栗色のふわりとした髪がなびくさまは、妖精のようだった。

そして顔のそれぞれの部位が、黄金比と呼んでも差し支えない大きさと配置になっていた。

他の四夫人も、皆が皆もちろん美しくはある。皇后不在の後宮で、もつとも皇帝の寵を受けているだけあって、下町で話題になるようなちよつとした美人では、太刀打ちできないほどの美貌を備えてはいる。

しかし、梁貴妃は群を抜いて美しい。彼女の美貌をめぐって、戦が起こってもおかしくないようにすら思えた。とっさに傾国の美女という形容が浮かぶほどの美人を、鈴苺は初めて目にしたのだった。

「あら、そうなの？ 梁貴妃様、そういうあなたはいつもとお変わりはあるって？ ごめんなさいねー、あなたっていつもキラキラと派手な色のものばかりお召しだから、いちいち見てないし、覚えてないのよね。目が疲れちゃうもの」

梁貴妃の嫌味を、につこりと微笑みながら受け流す林徳妃。とても慣れているような口ぶりだった。

確かに、言われてみれば梁貴妃の衣裳や装飾品は、濃い紅色や金色が多く、やたらとキラキラしているように映った。

顔自体が派手なつくりなのだから、もつと落ち着いた配色にしたほうがまとまりがあるような気がする。

……と、流行に疎い鈴苺ですら、そう思った。

「は!? な、何よ失礼ね！ あなたもその金歩揺（きんほゆ）、全然似合っていないから！ 趣味悪いわね！」

「あら、これは陛下が遠征のお土産に私にくださったものよ。陛下の感性を侮辱する気？」

「そ、そうなの!? なんですって……! 私にはくださらなかつたのにい!」  
 「まあ、嘘だけど」

「えっ、は、はあく!? ちよっとお!」

陛下から、と聞いた時は涙目になっていた梁貴妃だったが、それがからかいだと知るや否や、激高した様子で林徳妃に詰め寄る。

しかし林徳妃は「ふっ」と小さく鼻で笑って彼女をあしらうのだった。

梁貴妃は、意地が悪そうではある。

しかし素直に感情を表に出す様子と、その美貌があいまって、どこか憎めない人物に思えた。

「……梁貴妃様は、いつもあんな感じで嫌味を言ってくるんだけど、そのたびに徳妃様に返り討ちにあうのよね。それでも懲りずに、毎回言ってくるの」

またもや、桜雪が鈴苺に耳打ちしてきた。なぜかニヤニヤと、少しいやらしい表情をしている。

「へえ、そうなのですか。それにしてもとても素直そうなお方ですね。梁貴妃様は」  
 「ああ、鈴鈴も分かる? 姚淑妃様と白賢妃様は、梁貴妃様のことなんて相手にしてないからね。それもあるって、私たちの徳妃様にやたらと突っかかってくるの。まあ、徳妃様もあまり本気で話していない感じだけど……。一応、ああやって相手にはし

てあげてるから」

「……なんだかちよっとかわいそうに思えてきました」

掛け値なしの絶世の美女が、まさか四夫人の中では味噌っ<sup>かす</sup>滓とは。

——もしかして、徳妃様と仲よくなりたくないんじゃないか。

毎回ああやって絡んでくるとしたら、そうなのかもしれないと鈴苺は思った。

しかし見るからに自尊心が高そうだし、本人ですら自分の本心に気づいていない可能性も高い。

それにしても、だ。

林徳妃と梁貴妃の嫌味の応酬、にやつきながら四夫人の内情を話す桜雪に、やはりここは女の園なのだなど、鈴苺は実感した。

四夫人に仕える女官たちも、茶や水菓子の準備をしている他は、常に何やらひそひそと会話をしているようだった。

くすくすと耳障りな笑い声を漏らしたり、自分の主以外の妃嬪を見ては薄ら笑いを浮かべたりしている。

生まれてからずっと、道場で男性とばかり過ごしていた鈴苺は、女性らしい話題や空気に大層疎い。

——男装なんて! って最初は思ったけど。結果的には、よかったのかもしれない

わ。女としての私がここでやっていける気がしない……

そんな風に、劉銀にほんの少しだけ感謝の念を抱いていると。

「……………」

この場所に来た時から、その視線は感じていた。

殺気は感じられなかったので、新参者の自分を値踏みしているのだろうと、あまり気にしていなかった鈴苺だった。

視線の主が片時も鈴苺から目を離さないのだ。すでに十分ほどは経っていると思う。じっと、静かに自分だけを見つめるその様には、さすがに不信感を抱かざるを得なかった。

「……桜雪。あの、梁貴妃様の傍らに立っている方は、なんとという方ですか」

小声で桜雪に尋ねる。

するとなぜか、彼女は嬉々とした面持ちになった。

「まあ鈴鈴！ あのお方が気になるの!? なかなか審美眼に優れているわねえ。美男よねえ、彼」

「いえ、そういうことではなく……」

なんだか勘違いされている気がする。

戸惑いながらも否定するが、桜雪の言葉を聞いてその人物を改めて見ると「確か

に」と思ってしまった。

彼の主らしい梁貴妃に、どことなく似ていた。

茶褐色の澄んだ瞳に、風になびく栗色の髪。そして、これでもかというほど整った面立ち。

ひょっとしたら、梁貴妃と血縁関係にあるのかもしれない。

現在の後宮の規則は、歴史の中では割と緩いほうであり、妃嬪の親族の男性ならば、専属の武官や文官として配置される場合がある。ただし、通いであり夜間は立ち去らなければならないが。

例の彼は、宦官服ではなく、装飾が施された空色の甲冑を身に着けているため、やはり梁貴妃と血の繋がりのある男性武官のようだ。

槍の使い手らしく、彼の身長よりも長さのある槍を立てて佇んでいる。穂先の根元には、深紅の槍纓そうえいが結ばれていて、風で鮮やかに靡なびいていた。

「あら、違うの？ 私はてっきりあなたも目を付けたのかと」

「違います……って、あなたもってことは、桜雪はあのお方をお慕いしているのですか？」

「ふふ、まあね。あの人は梁貴妃様の専属の武官の梁光潤しょうじゆん様よ。確か、貴妃様の分家の血筋だったかしら。いつも冷静沈着なんだけど、槍を振るう姿が本当にかっこよ

くて……！ あー、でも梁貴妃様と親戚になっちゃうのはちよつとねえ……。まあ、私なんか光潤様のお目に留まるわけはないんだらうけど」

「はあ……。とりあえず、彼の素性についてはよく分かりました。ありがとうございました」

桜雪の言葉の後半の乙女心垂れ流しの部分は話半分に聞きつつ、素直に礼を言う鈴苺。

しかし、彼——光潤の正体は分かったとはいえ、なぜ彼が自分を注視し続けるのはまったく分からなかった。

——気になっちゃうわ。私こういうの、そのままにしておけないのよね。

鈴苺は彼のほうへ近づいた。

もちろん、護衛として林徳妃を守るのが最優先なので、彼女のほうに注意を払いながら。

「先ほどから、私のことをずっと見ていらっしやいますけれど。私の顔に、何かついているのですか？」

首を傾げながら、素直に尋ねた。

すると光潤は、しばしの間鈴苺の頭頂部から足先まで視線を這わせるように眺めた。彼は眉をひそめて鈴苺を見つめながら、口を開いた。

「いや……。新しい林徳妃様の護衛が、女性のように小柄なので信じがたかったのだ。近くで見ると、ますます小さいな」

「ああ、よく言われます」

女だてらに武芸をやっていると、そのようなことを言われることは多く、鈴苺は慣れきっていた。

——まあ、確かに。大きくて力の強そうな人と比較したら、見るからに弱そうよね。華奢で身長の低い自分を光潤が過小評価するのはいたし方のないことだと、鈴苺は素直に思う。

「……林徳妃様が心配だ。そなた、まるで腰の刀に支えられているようではないか。本当にその細腕でそれを振るえるのか？」

椰揄したつもりだったのに、まったく動じた様子のない鈴苺が気に入らなかつたのか、光潤は槍底で地面をトントンと叩きながら、瞳に圧を込めて言う。

「そうですね。こう見えてわりと力持ちなんですよ」

「とてもそうは見えん。そなた、武官ではなく内儀司や内食司に勤めることをお勧めする」

「あいにく、芸事や料理は苦手で……。あ、刀舞なら少し。うーん、でもやっぱり私が一番得意なのは刀術でして」

「……やはり何かの間違いでは」  
 実力がないと信じて疑わない様子の光潤に、とうとう鈴苺は困窮してしまった。と、言っても彼に舐められているとは微塵も思っていない。

——この人、本気で林徳妃様の安全を心配しているんだわ。うーん、私ならそれに護衛の任をこなせるって、どう説明したらいいんだろう。

道場で、実直な門下生たちとばかり過ごしていた鈴苺は、これまでややこしい感情を向けられたことがなかった。

「ちょっと光潤。鈴鈴は陛下のご推薦で私の武官になったのよ。その物言いは失礼ではなくって？」

林徳妃がふてくされた様子で言うが、光潤は眉間に皺を寄せたまま「いや、しかし」とぼやく。

「あら、でも光潤の言う通りじゃない。その子明らかに弱そうだし、女の子みたいにかわいい顔をしているもの。護衛なんて務まるの？ あなたのところは人材不足でかわいそうねえ」

水菓子みづこの刺さった肉叉にくさを手に、小馬鹿にしたように梁貴妃が言った、次の瞬間だった。

「——そこまで言うなら、試してみるか？」

それは、涼し気で威厳のある声音だった。四夫人や女官たちの甲高い談笑の音が、一瞬で止む。

「陛下……！」

光潤が驚愕の声を漏らした後、その場で慌てて叩頭こうとうした。虚を突かれた鈴苺も、彼に倣うようにひれ伏したのだった。

——え、なんでいきなり劉銀がここに？

頭を地面につけながら困惑する鈴苺。唐突すぎた久しぶりの再会に、気持ちがついていかない。

「へ、陛下！ いらっしやるとはお聞きしていなかったもので……。すぐに席をご用意させますわ！」

林徳妃の慌てふためく声が聞こえてくる。

他の四夫人からも、「このような場に来ていただけるなんて」「とにかくこちらにお座りください」なんて声があった。

「そんなにかしこまらなくてよい。書状の確認に飽きて外に出たら、賑やかな声が聞こえてきたものでな。皆、頭を上げて楽にせよ。光潤……鈴鈴も」

言われた通り顔を上げると、劉銀は鈴苺の目の前で仁王立ちしていた。彼の隣には、専属武官の祥明がついている。

——随分、皇帝っぽくなったわね……

最後に劉銀と相對したのは、彼が十二歳のころだ。

八年の月日は、小柄でどちらかというと頼りなかった少年を、立派な美丈夫に仕立て上げていた。

公式の行事や朝議ではないからか、劉銀はゆったりとした平服に身を包み、夜の闇のように艶やかな黒髪の上部分だけを簡素にまとめている。

頭髮と同色の漆黒の瞳には、穏やかだがどこか達観したような光が宿っている。それは弱冠二十歳ながら華国を治める皇帝として、とても似つかわしいと鈴苺には思えた。

そして、少年時代は少女と見まがうほど美しかった美貌は、もちろん眩しいままだった。

しかし、平服の上からでも分かる鍛え抜かれた胸板に、しっかりと出た喉ぼとけには、昔は感じられなかった雄々しさが溢れている。

男らしく変貌した劉銀だったが、鈴苺には特に感動はなかった。彼に対しては、今是不満しかなのである。

——もう、男装して後宮に入れたなんて無茶な命令をしてきて。一体何を考えているのかしら。

こっそり劉銀を睨みつける鈴苺。すると、その視線を察したのか彼とはたりと目が合ってしまった。

鈴苺の不躰な瞳に戸惑う様子もなく、劉銀はにやりと不敵に笑う。鈴苺は頬をひきつらせた。

「——陛下。先ほど、『そこまで言うなら、試してみるか』とおっしゃっていましたが」

光潤が尋ねると、劉銀はふふ、と小さく笑い声を漏らす。

「光潤と梁貴妃は、鈴鈴の腕を信じられないのだろうか？　だから、試せと申したのだ」

「……どういうことでしょうか？」

「何、簡単なことだ。光潤と鈴鈴がこの場で軽く手合わせすればいいだろう」

どこか愉快そうに微笑みながら、劉銀は言う。彼の傍らに立つ祥明が苦笑を浮かべた。

「この場で、でございませうか……？」

突拍子のない提案に、少々戸惑ったように光潤が尋ねる。

「うむ。お前だけでなく、梁貴妃も鈴鈴の実力に懐疑的なようではないか。たださえ、今の後宮は殺伐としているのだ。四夫人間の疑念はできるだけ少なくしておき

たい」

「……って、もつともらしいことをおっしゃいますが。おもしろそうだからけしかけているだけではないのですか、陛下」

一応最低限の敬語は使っているが、からかうように祥明が言う。まるで同年代の友人を茶化すように。

「うむ、その通りだ」

「ですよね」

悪びれた様子もなく肯定する劉銀に、呆れた様子の祥明。

他の者が動じていないことから、このふたりの掛け合いはいつものことのようにだ。付き合いの長い祥明は、劉銀にとつて気を許せる存在なのだろう。

「陛下がお望みであれば。俺が彼のような小さく非力な者に、敗北を喫することなど考えられません」

澄ました表情で光潤が言う。だが、槍を見せつけるように構える様子からは、絶対的な自信が見て取れた。

そんな光潤に、祥明は近づく。

「……光潤、お前」

「なんだ」

「痛い目見んぞ、気をつける」

祥明はボンボンと彼の肩を叩きながら、憐れむように言った。同僚だからか、ふたりとも気安い口調だ。

光潤は祥明の忠告がまったく理解できないようで、小さく首を捻るだけだった。

「宴席の奥なら、ちよつと広さがあるので立ち合いができそうです」という桜雪の声に、一同はそちらへ移動した。

対峙する鈴苺と光潤を囲むように、劉銀や祥明、四夫人、女官たちが立ち会う。

もちろん余興の立ち合いで斬り合うわけにはいかないので、劉銀が女官に命じ、武器庫から模造刀と模造槍を持ってこさせた。光潤は切っ先が削った木でできた槍を構える。

鈴苺はというと、模造刀は受け取らない。鞘に入れたままの愛刀を構えた。

「……変わった曲刀だな」

光潤が鈴苺の刀を眺めながら言った。

「さすが、武官の方は分かるんですね！ これは東の国から伝わった、倭刀という代物なのです。とてもいい刀なのです！」

思わず弾んだ声を上げてしまう。

華国で使われる曲刀と言えば、身幅が広く祥明も愛用している青龍刀せいりゆうどう、またの名

を柳葉刀りゅうようとうが定番だ。

細い刀身の倭刀わとうは、鈴母も自分以外の使い手を見たことがない。五年ほど前に、父が行商人から買ったものを試しに振ってみたら、とてもしっくりとくる太刀筋になった。

手が小さく男性よりも筋力のない鈴母には、青龍刀せいりゅうとうに比べると軽量で細い刃が適合したのだった。

それからはずっと倭刀わとう一筋で稽古に励んだ。

盲愛とも言えるほどお気に入りわとうの刀なのに、知名度がまったくくないため誰とも倭刀わとうについて語り合うことができなかった。光潤が物珍しさに気づいてくれただけで、鈴母は嬉しかったのだ。

「なぜそのように嬉々とした面持ちになるのだ」

「え？ いえ、この刀のお話ができて、嬉しくて」

「……そなたと話していると調子が狂う。そなたと俺は、今から一戦交えるのだぞ」

「あ！ はい！ よろしくお願います！」

光潤がなぜ調子を狂わせるのかは分からなかったが、今日初めて刀を振るえることがやはり嬉しくて、満面の笑みを浮かべてしまう。

鈴母は、刀を振り回すことが何よりも生きがいであった。三度の飯よりも、洒落た

衣裳に袖を通すことよりも、断然。

「なんかごちゃごちゃ話してるけど、そろそろ始めていいか？」

劉銀に立会人を任されたらしい祥明が、向かい合っているふたりの傍らに立つ。

「いいぞ、祥明」

「私もです」

「うん。勝敗の決め方だが、相手の体に一太刀入れるか、武器を吹っ飛ばしたほうが勝ちだ。——始め！」

祥明の掛け声とともに、立ち合いが始まった。

一瞬で勝敗がついてしまった。

模造とはいえ、重量のある長槍が宙を舞う。回転しながら、女官たちが団子になっているほうへ落下してしまった。

彼女たちが慌てた様子でそれをかわすと、槍を飛ばした張本人である鈴母は「も、申し訳ありません！ 当たった方はいらっしやいませんか!？」と謝罪しながら駆け寄った。

光潤は、呆然と立ち尽くしていた。何が起こったのか、理解していないような面持ちだった。

祥明の開始の音が聞こえた直後。

大きく槍を振った光潤の懐に鈴苺はさっと飛びこんだ。

そして両手で持った倭刀わとうを渾身の力で振るい、槍の柄を弾いて吹っ飛ばしたのだった。

そんな瞬時の攻防を、一体、この場にいた何名が目で見追っていたのだろうか。

感嘆の口笛を吹いた祥明と、立ち合い前から悠然とした微笑みを浮かべている劉銀くらいかもしれない。

「……陛下も人が悪いですね」

放心状態の光潤と、どよめいている女官たちを尻目に、祥明が呆れたように微笑む。「何がだ」

「鈴鈴の実力を分かっていながら、けしかけるとは。光潤、衝撃を受けているじゃないですか」

「よい薬になったではないか。あれを馬鹿にする輩は、何人なびとたりとも許さぬ」

冗談めかした口調だったが、劉銀の目は据わっている。「あ、本気だ……」と、祥明は密かに恐れおののく。

「まあ……。俺だって、速さじゃ鈴鈴に勝てないしなあ」

慌てた様子で女官に頭を下げている鈴苺を目を細めて眺めながら、祥明は独り言

ちる。

道場で一緒に稽古に励む時。鈴苺と祥明は、今のような立ち合いの五本勝負を、よく行っていた。

日夜鍛錬に励んでいるとはいえ、やはり鈴苺は女性。筋力も持久力も、祥明には遙かに劣る。

皇帝専属の武官である祥明が勝ち越す確率はやはり高かったが、最初の一本に限っては、祥明が鈴苺に勝利したことは一度もなかった。

瞬間的な素早さについては、祥明はどうしても鈴苺に敵わないのだ。

さらに、女性ならではの柔軟性から繰り広げられる、倭刀わとうの複雑な動きは、気を張っていても毎度虚を突かれてしまう。

一瞬の速さと柔らかな身のこなしでなされる鈴苺の太刀筋を見極められる武官は、華国の雄大な歴史を遡っても、そうは存在しないだろうと祥明は思う。

そして何よりも、その華奢な体には不釣り合いともいえる長い曲刀を、自由自在に操りながら鈴苺が宙を舞う姿は、芸術と称しても過言ではないほど、鮮やかで美麗だった。

流水のように、疾風のように軽やかな動きは、さながら蝶のようだった。

現に、茶会に参加していた四夫人は皆、呆気に取られたように鈴苺を眺めていたし、

どよめきが落ち着いた場合は水を打ったような静寂に包まれていた。皆、鈴母の速さをきつと目では追えていないはずだ。しかし、その身のこなしの美しいことだけは網膜に焼きついているだろう。

「……俺がこんな小柄な者に……？ 嘘、だろ？」  
 いまだに現実を受け入れられないらしい光潤は、虚ろな瞳でぶつぶつと独り言ちていた。

鈴母はそんな彼の様子など気づいていないようで、「ありがとうございました！」と爽やかに声を張り上げ、行儀よく一礼した。

——すると。

「す、すごいじゃない鈴鈴！ かっこよかったー！」

林徳妃が、興奮した様子で鈴母に駆け寄った。それをきつかけに、今まで静まり返っていた女官たちがざわめき出す。

「な、何……？ あの小さな女官が、光潤様を……？」

「まさか……。そんなことって」

「鈴鈴って呼ばれていたわよね。結構、かわいい顔してない？」

「……私さっきから胸の鼓動が収まらないのだけど。恋かしら？」

なんて会話が聞こえてきて、祥明は苦笑を浮かべた。

鈴母の男装した姿を目にした時から「かわいすぎる。女官に恋情を抱かれやしないか」と懸念していたが、ここまであつさり予想通りになるとは。

まあ、美少年が背の高い武官をあつさりと倒す姿は、あまりにも絵になりすぎた。女官たちが興奮するのも仕方あるまい。

鈴母は、林徳妃とその周囲の女官に褒めちぎられて、照れ笑いを浮かべていたが、まんざらでもなさそうだった。

その一方で――

「……ふん！ さつさと帰るわよっ！ ほら、光潤！」

自身の護衛があつさりと敗北し、屈辱らしい梁貴妃は、金色の刺繍が入った袴裙じゆくろんをばさりと翻し、藤棚の奥へ消えていった。

その後には、いまだに心ここにあらずといった様子で、ふらつきながら光潤が続いていく。

「……やっぱおもしろくなりそうだな」

普段の、女臭さしかない茶会とはまったく違った光景に、祥明は密かに微笑むのだった。

四夫人による茶会が行われた日の、夕刻のこと。

鈴母はなんと、劉銀の執務室へ呼び出された。

——劉銀には早く話を聞きたいと思っていたから、ちようどよかったわ。なぜ自分を武官として後宮入りさせたのか。女官の行方不明事件との関連はあるのか。そして何よりも、なぜ男装させたのか。

彼には尋ねたいことが山ほどあった。

執務室の扉の外には衛士が槍を立てて立っていた。彼は鈴母の姿を一瞥すると、扉の中に向かってこう声を張り上げた。

「陛下、武官が参りました」

「通せ」

執務室からはすぐに、朗々たる声が返ってくる。衛士が扉をそっと開けると、鈴母はゆっくりと足を踏み入れた。

劉銀は執務のための机ではなく、くつろぐための茶卓に向かうように席についていた。彼の傍らには、祥明が佇んでいる。

「鈴め……鈴翔、参りました」

その場で叩頭する。

皆が鈴鈴と愛称で呼ぶので、まだ男性名に慣れておらずすっかり本名を言いそうになっってしまう。

——まあ、ここは私が男装をしていることを知っている人しかいないから、別にいいのかも。

「そんなにかしこまるな。楽にしろ」

「——はい」

劉銀に言われた通りに顔を上げる鈴母。

しかし劉銀は、いまだに跪いている鈴母に対して、眉をひそめて不満そうな顔をする。

「だから、かしこまるなど言っているだろう。ここには俺と祥明と、お前の三人しかない。この面子の時は、昔のようにしろ」

「昔のように、とは……？」

「俺がお前の父……朱敬輝殿の道場に身を置いていた時のようにだ。あのころは、身分の差などないようなものであっただろう」

「あ……。劉銀、よく鈴鈴にぶん殴られてたよな」

「お前にもな」

気安く話し出す劉銀と祥明。その掛け合いは、本当に遠いあの日々を思い起こさせた。

「……なるほど。分かりました。では、お言葉に甘えて」

鈴母は立ち上がると、すたすたと劉銀に近寄った。そして彼と向かい合わせになるように茶卓につく。

——そして。

「……ちよつと劉銀！ どういうことなのです!? 妃の護衛はまあ分かりますけど、なぜ男装なのですか！ 納得のいく理由を説明してくださいね！」

茶卓ごしに劉銀に詰め寄りながら、鈴母は声を荒らげた。

——とにかく、まずはこれを言ってみようかと思ったのよ！

ずつと抱えていた疑問をぶちまけることができたためか、興奮して呼吸すら荒くなってしまう鈴母。

肩で息をする鈴母を、少しの間劉銀は目を見開いて眺めていたが、なぜか抱腹し始めた。

「はははは……。いや、鈴鈴、お前は昔のままだなあ。まったくすれていないようで、俺は安心したぞ」

「何を笑っているんですか!? こっちは笑いごとじゃないんですからね！ 廁かわやや着替えなど、いちいち大変なのですよ！」

「まあまあ、落ち着け。青茶せいちやが入っている。飲みながら、話をしようじゃないか」

「まったく……」

促され、茶卓に置かれていた茶杯を手取る。

まだ淹れたてのようで、ほどよい熱さだった。

青々しいが、濃厚で上品な苦み。

普段自分が道場で淹れていた、ただのどを潤すための茶との味の差はもはや歴然だった。

茶杯も虹色の光沢のある螺鈿らでん細工さいこうが施されており、一目見て最高級品だと判別できる。

茶葉も茶器も、皇帝に献上されたものなのだから、至高の一品なのは当然のことである。

ただの昔馴染みの男が、一国の主であることを改めて思い知らされる。

——やっぱり曲がりなりにもこの人は皇帝なのよね。本当に昔のように振るまって大丈夫なのかな……。でも、本人がそれでいいって言っているし、祥明もそんな感じだし。まあ、いいわよね。

一瞬皇帝の威光に戸惑ったものの、深くは考えないことにする。

「さっきの問いだがない。いろいろ思案した結果、これが一番いい方法だったのだ」

「……私を男装させて林徳妃様の専属の武官にすることがですか？」

「そうだ」

劉銀はこう説明した。

女官の行方不明が立て続けに起こっているため、後宮内の警備を厚くすることにした。

特に、現在もっとも位の高い四夫人には、専属で武官をつけるよう命じた。

だが、専属の武官ともなれば、絶対の信頼がおける人物でなければならぬ。

女官や衛兵に紛れた間諜に妃嬪が殺められることは、後宮ではそう珍しいことではないからだ。

林徳妃以外の四夫人は、信頼のおける女官の中に武官がいたり、縁者に腕の立つ者がいたりしたので護衛はすぐに決したが、林徳妃だけはそのつてがなく、なかなか護衛をつけることができなかった。

寵姫である彼女を守れないのはまずい……と、思考を巡らせた結果、劉銀は鈴苺の存在に思い当たったのだ。

鈴苺ならば、劉銀とは旧知の仲で絶大な信頼がある。

後宮内で練り広げられる権力争いとも、まるで関係がない。武道についての実力も申し分がない。

そして、男装をさせた理由だが、それは女官の行方不明に起因する。

女として後宮入りさせれば、それこそ鈴苺だっただわかされてしまうかもしれない

いのだから。

宦官からはひとりも行方をくまませた者がいないことから、「それでは宦官のふりをして男装させて護衛をすればいいではないか」という結論に、劉銀は至ったのだとのこと。

「ええ……。でもひとりくらいはいらっしゃったのではないんですか？ 武芸達者な

男性や宦官が。だってここは、華国の後宮ですよ？」

腕自慢の猛者たちが、国中から集まる場所である。「武芸達者な者なら、あまりあるくらいいる。……が、やはり確実に信用できる人物となると、一気に難しくなる。善良そうな顔をして裏切る輩など、ごまんといる場所だ。その点お前には、一切その心配はない」

「うーん……。それは、そうかもしれないですけど……。いや、でもやっぱり男装って。ちょっと、あり得ないと思うんですけど……。いや、でもやっぱり男装って。あり得ないなんてことはない。お前は男装してもかわいらしいと俺は信じていた。

そして俺の勘は当たっていたようだな」

劉銀はやけに真剣な顔で言うが、なんだか話の筋がずれていると思う。鈴苺は困惑した。

「いえ、そういう問題ではないと思うのですが」

「それに久しぶりにお前にお前にゆっくり会いたかったし……」  
 きりりとした顔で鈴母を見つめる劉銀。やっぱり話の方向がおかしい。なぜか祥明が不快そうな面持ちになった。

「はあ……？　まあ私も会いたかったですけど、こんなにまわりくどいことをしなくてもよいでしょう」

「しかし、茶会に招待したくらいでは一日しか一緒に過ごせんではないか。長くともに過ごすには、やはり後宮内の職に就いてもらわねば」

——なんでそんなに私を近くに置いておきたいのだろう。

劉銀が道場を卒業した後は、何の便りもなかったというのに。今になってなぜなのかと、鈴母は不思議に思う。

しかし、そんなことより。

「会いたかったというお言葉は嬉しいですが……。やはり、男装して宦官かんがんになって……というやり方は無茶ですよ」

「まあ、これを思いついた時は若干……いや、かなり、なんておもしろいことを俺は思いついたのだろうと、興奮した」

「……は!?　一体私をなんだと語っているんですか!」  
 にやつきながらとんでもないことを語ってのける劉銀に、鈴母は再度まくし立てる。

しかし彼は、ますます笑みを深くするのだった。

「実際、茶会での立ち合いはおもしろかったしなあ」

今まで、鈴母と劉銀の会話を眺めていただけの祥明が、口を挟んできた。

「祥明、あなたまで……」

「いやいや、だって光潤って、武官の中じゃ相当強いほうだぞ？　俺だって全然気を抜けない相手なんだけど。ってか、立ち合いで負けたことだってあるし」

「うむ。まさかあんなにあつさりと光潤から一本取ってしまうとはな。予想以上に腕を上げたな、鈴鈴」

「あ、でもあの人もっと強いと思います。私が見るからに弱そうだから、油断していたのではないかと。たぶん、次やったらあんなに簡単には勝てないですよ。それこそ負けるかも」

光潤のことを思い起こしながら鈴母は言う。

——あの人が、私が武官であること自体疑ってかかっているくらいだったもの。そんなじゃ、私と勝負になるはずないわよね。

そんなことを考えていると、劉銀は鈴母を見ながら小さく声を出して笑っていた。何もおもしろいことは言っていないはずなのに一体何なのだと、鈴母は思わず彼を半眼で見据えてしまう。